

〔論 文〕

# 解釈レベルがステレオタイプ反証刺激の 非意識的評価に及ぼす影響<sup>1)</sup>

藤 島 喜 嗣

Effect of Construal Level on Unconscious Evaluation of Stereotype-inconsistent Stimuli

Yoshitsugu FUJISHIMA

The present study investigates the effect of construal level on unconscious evaluation of the stimuli about Black people who are inconsistent with racial stereotypes. While Black people could be represented abstractly as a “prototype”, they could also be represented concretely as an “exemplar”. Construal level should moderate which group representation would be used. Especially, people who think abstractly should represent Blacks as a prototype, while people who think concretely should represent them as an exemplar. Sixty-six female undergraduates participated in an experiment in which their construal mindset was manipulated and were asked to do the single category IAT using pictures of competent Black celebrities. Contrary to the prediction, participants in concrete mindset condition evaluated positive black celebrities negatively. It suggests that they might use racial stereotypes (i.e. prototypes). The results are discussed in terms of the availability of exemplars, the contents of stereotypes, and the cognitive structure of group representation.

*Key words:* *construal level* (解釈レベル), *stereotype* (ステレオタイプ), *single category IAT* (単一カテゴリ-IAT)

## 問 題

### 解釈レベル理論

解釈レベル理論 (Trope & Liberman, 2003, 2010) は、時間的距離をはじめとする心的距離と、思考の抽象度すなわち解釈レベルとの関連を説明したものである。この理論によれば、対象との心的距離が大きくなるほど、その対象は抽象的に解釈され、心的距離が小さくなるほど具体的に解釈される。

解釈レベルの相違は、心的距離だけではなく、直前のマインドセット操作によってももたらすことができる (Fujita, Trope, Liberman, & Levin-Sagi, 2006; 樋口・原島, 2012)。樋口・原島 (2012) では、ターゲットとなる課題の直前に、表象の上位もしくは下

位に位置する表象を想起させる課題を 20 題実施し、抽象もしくは具体マインドセットを操作している。彼らは、達成動機づけが課題への勉強量予測に影響することを見いだしているが、その影響は抽象マインドセット時に限定されていた。これは、樋口・埴田・藤島 (2010) の結果と整合する。樋口ら (2010) では、達成目標を活性化させることが勉強力予測に影響を及ぼしたが、この影響は時間的距離感が遠い場合に限定されていた。これらの結果は、マインドセット操作によって解釈レベルの相違が生じることを示している。

このような解釈レベルの相違は、知識構造上で用いられる階層水準の相違と考えられる (藤島, 2008, 2011)。藤島 (2011) では、誠実さ特性を活性化した

とき、遠方条件で特性に対応した将来予測をした。また先述の通り、樋口ら（2010）では、達成目標の活性化による影響は時間的距離感が遠い場合に限定されていた。特性や達成目標は特定の動作、手段等に対する上位表象であり、それゆえ抽象的な解釈を導きうる。これらの表象の利用が遠い将来の予測に限定されていたのである。その一方、藤島（2008）では、自分に関わるエピソード記憶を想起した際、将来予測に影響することを示したが、それは予測事象を時間的に近く感じる場合に限定されていた。つまり、特定の動作、手段を含む知識表象が近い将来の予測に利用されていたことになる。これらは、解釈レベルの相違が認知、判断に利用される概念的知識の抽象レベルによってもたらされることを示唆している（cf. Rosch, Mervis, Gray, Johnson, & Boyes-Braem, 1976）。

この考え方を対人認知過程に適用すると集団表象の問題となる。対人認知過程においては集団表象が用いられる（Fiske & Neuberg, 1990; Brewer, 1988）。たとえば、活性化したステレオタイプは曖昧な行動の解釈に利用される（Devine, 1989）。ステレオタイプのようなカテゴリー化された集団表象は、集団成員が共通して持つと考えられる特徴によって記述された典型例（prototype）の形をとり、抽象的であると考えられる。その一方で、集団は事例（exemplar）の形でも表象され、具体的表象にもなりうる（Hamilton & Sherman, 1994）。Hamilton & Sherman（1994）によれば、集団に関して典型例と事例の両方の知識が記憶貯蔵されており、カテゴリー化の際にはどちらかの知識が用いられる。本研究では、この調整要因として解釈レベルの相違を考える。抽象的に解釈するときにはカテゴリーや典型例のような階層上位の知識を用い、具体的に解釈するときには事例のような階層下位の知識を用いると考えられる。

#### 抽象度の異なる集団表象とその競合

集団表象においてステレオタイプもしくは典型例と事例とでは評価が競合することがある。たとえば、一般的に黒人集団に対するステレオタイプは否定的なものである。他方で、黒人集団成員であるが肯定

的評価を受ける事例（ex. バラク・オバマ）もある。この場合、抽象的な集団表象と評価的に競合することになる。このように否定的ステレオタイプ集団における肯定的成員はその評価が競合しうるが、この肯定的成員の評価は知覚者の解釈レベルによって異なる可能性がある。抽象的に解釈される場合には、人種に関わる否定的ステレオタイプが適用され、否定的評価を受けると考えられる。その一方で、具体的に解釈される場合には、肯定的成員に関する個別知識もしくは事例知識が適用され、肯定的評価を受けるかもしれない。つまり、心的距離や直前のマインドセット操作によって、否定的ステレオタイプ集団における肯定的成員の評価が異なることが予測できる。

本研究は上記の予測を、黒人肯定事例の写真刺激を用いて検討する。写真刺激は多くの場合、ステレオタイプもしくは典型例の特徴を有すると同時に、人物個別の事例の情報も有している。肯定的評価を受けている黒人の写真はその意味で多義的である。このような写真刺激を用い、潜在連合テスト（Implicit Association Test: IAT）、特に単一カテゴリー-IATを実施する。

IATでは、実験参加者に2つのターゲット集団と肯定語や否定語をカテゴリー分けする課題を行わせる（Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 潮村・村上・小林, 2003）。この時、一方のターゲット集団と肯定語との組み合わせともう一方のターゲット集団と否定語との組み合わせにカテゴリー分けする時の反応時間と、この組み合わせを入れ替えてカテゴリー分けする時の反応時間を比較することで、潜在的偏見の指標を得る。IATは2つのターゲット集団を用いるが、人種ステレオタイプに関しては白人集団と黒人集団を組み合わせることになる。これに対し単一カテゴリー-IAT（Karpinski & Steinman, 2006）は、ターゲット集団が1つである。課題として、ターゲット集団および肯定語のグループと否定語のみのグループへの分類と、肯定語と否定語を入れ替えた組み合わせでの分類を行う。この2つの組み合わせの反応時間を比較することで、ターゲット集団に対する潜在的偏見の指標を得る。この場合、

人種ステレオタイプに関しては、たとえば黒人集団のみをターゲットとすることができる。

本研究では、一般的な IAT ではなく単一カテゴリ-IAT を用いることとした。理由として 2 つあげることができる。1 つは、本研究の目的が単一集団における集団表象の相違を検討することであり、対義的な集団を必ずしも必要としないからである。もう 1 つの理由として、黒人集団の対となる白人集団において、良く知られているステレオタイプ反証事例をあげることが困難だったためである。この困難の理由には、白人ステレオタイプが黒人ステレオタイプよりも相対的に肯定的評価を受けていることが考えうる。そのため、白人ステレオタイプの反証事例となる否定的評価を受けた白人に対して持続的に接触することが少ない可能性がある。この可能性を検討することは極めて興味深い本研究の範疇を超えるので、便宜上考慮しないこととした。

本研究の仮説は次のようになる。まず、具体解釈の場合と比して抽象解釈の場合には、否定的典型例が影響し、肯定的評価を受けうる事例の写真を刺激に用いた IAT で相対的に否定的評価を示すだろう（仮説 1）。また、具体解釈の場合と比して抽象解釈の場合には、否定的典型例が影響するので、典型例条件の IAT の成績と事例条件の IAT の成績との間で相対的に強い正相関を示すだろう（仮説 2）。これらの仮説を以下の個別実験で検証した。

## 方 法

### 実験参加者

東京都内の大学に通う女子大学生 66 名（平均年齢 20.02 歳、 $SD=.89$ ）が実験に参加した。具体条件もしくは抽象条件に無作為配置された。

### 手続き

実験は実験参加に同意を求めた上で 1~2 名で実施した。最初に解釈レベルの操作として、樋口・原島（2012）を参考に課題を行った。課題は 20 項目に対して連想を求めるものであった。抽象条件では、対象語がどのようなカテゴリーに含まれるか考えさせた。たとえば、「クワガタ」がどのようなカテゴリーに含まれるかを考えさせ、その結果の記載を求

めた。この場合、「虫」などと記載されることになる。具体条件では、対象語の具体例がどのようなものかを考えさせた。たとえば、「クワガタ」にはどのような具体例があるかを考えさせた。この場合、「ノコギリクワガタ」などと記載されることになる。この課題に 5 分間従事させた。

次に黒人への潜在的偏見を測定する単一カテゴリ-IAT (Karpinski & Steinman, 2006) を典型例条件と事例条件の 2 回実施した。刺激提示ソフトとして Millisecond 社の Inquisit 4 を用いた。条件の順序はカウンターバランスをとった。黒人写真と否定語もしくは肯定語との組み合わせでそれぞれ練習試行を 24 試行、本試行を 72 試行実施した。試行においては、試行前休止を 250 ms 設けた後、分類刺激を 1500 ms 提示した。この間に反応がなかった場合には、素早く判断するよう教示を行った。誤反応にはフィードバックを行ったが、正答は求めなかった。手続きとしては、最初、練習試行を行い、次に本試行を実施した。その後、組み合わせを変えた練習試行を行い、次に新しい組み合わせの本試行を実施した。否定語、肯定語の組み合わせ順序はカウンターバランスを行った。

刺激は肯定語、否定語を各 18 語用意した。使用した刺激語を表 1 に示す。肯定語、否定語には性格特性に関わる単語（例、やさしい、にぶい）の他に性格特性に関わらない単語（例、平和、災害）も含め、より抽象的な肯定、否定カテゴリーを示すよう配慮した。人物刺激は、著名でない黒人の顔の一部（典型例条件）、肯定評価を受けている有名人の顔全体（事例条件）を各 8 刺激用意した。刺激人物は男女各 4 名とした。典型例条件の刺激は、目と鼻を中心とし、髪型、口、輪郭を含まないようにした。事例条件では、男性有名人として「バラク・オバマ」「ネルソン・マンデラ」「ウィル・スミス」「スティーヴン・ワンダー」の 4 名を取り上げた。女性有名人として「ジャネット・ジャクソン」「ビヨンセ」「ホイットニー・ヒューストン」「セリーナ・ウィリアムズ」の 4 名を取り上げた。テストにおいてはこれらの刺激から 7:7:10 の割合でランダムに提示した。前者 2 つは同カテゴリーとされるものであり、

表1 単一カテゴリー IAT に用いた肯定語・否定語

肯定語		否定語	
正義	笑顔	不幸	損失
平和	やさしい	嫌い	冷たい
豊か	おだやか	わるい	きびしい
幸せ	あたたかい	災害	陰湿
楽しい	おおらか	戦争	冷酷
うれしい	強い	反対	弱い
満足	じょうず	失敗	おろか
正しい	元気	敗北	にぶい
安全	勤勉	絶望	でたらめ

表2 事例刺激の知名度, 有能さ, 親しみやすさ

人物	知名度	有能さ	親しみやすさ
バラク・オバマ	100.0%	6.32 (1.00)	5.58 (1.15)
ネルソン・マンデラ	63.6%	5.60 (1.33)	5.06 (1.37)
ウィル・スミス	92.4%	6.26 (0.97)	5.96 (1.17)
ステイーヴィー・ワンダー	75.8%	5.88 (1.35)	4.97 (1.52)
ジャネット・ジャクソン	74.2%	5.15 (1.14)	4.74 (1.46)
ビヨンセ	93.9%	6.00 (1.07)	5.38 (1.61)
ホイットニー・ヒューストン	56.1%	5.42 (1.22)	4.77 (1.33)
セリーナ・ウィリアムズ	16.7%	5.10 (1.24)	4.46 (0.98)
全体	平均 5.73 名 (1.67)	5.72 (0.68)	5.09 (0.86)

註) 知名度は、実験参加者 66 名中、当該事例刺激を知っていた割合を示す。有能さおよび親しみやすさにおける数値は平均値を表す。カッコ内は標準偏差。

人物刺激と評価語で 14 とした。残りの 10 は対義となる評価語であった。

最後に事例条件で使用した人物の既知に関する質問と、有能さ、親しみやすさに関する印象評定を行った。事例条件で使用した人物の写真と名前を提示し、当該人物を知っているか、「知っている」もしくは「知らない」の 2 件法で回答を求めた。その後、「有能だ」「親しみやすい」の各語に対して「あてはまらない」から「あてはまる」までの 7 件法で回答を求めた。質問紙回答後、デブリーフィングを実施した。

## 結 果

### 事例刺激

事例刺激 8 名中、何名を知っていたかを確認した。その結果、平均 5.73 名 ( $SD=1.67$ ) 知っていた。事例刺激を全員知っていることを期待していたが、そのような結果は得られなかった。各事例刺激の結果を表 2 に示す。バラク・オバマ (100.0%)、ビヨン

セ (93.9%)、ウィル・スミス (92.4%) のように高い知名度を示す事例がある一方、セリーナ・ウィリアムズ (16.7%)、ホイットニー・ヒューストン (56.1%)、ネルソン・マンデラ (63.6%) のように低い知名度を示す事例もあった。

印象評定に目を移すと (表 2 右列)、全刺激事例での平均指標 (以下、全体) では有能さで平均 5.72 ( $SD=0.68$ )、親しみやすさで平均 5.09 ( $SD=0.86$ ) となった。理論的中央値 4 と比較すると、いずれも有意差が認められた (有能さ:  $t=19.77$ ,  $df=61$ ,  $p<.001$ ; 親しみやすさ:  $t=9.93$ ,  $df=61$ ,  $p<.001$ )。各事例刺激においても、理論的中央値 4 と比較していずれも有意差が認められた (有能さ:  $ts>7.01$ ,  $ps<.001$ ; 親しみやすさ:  $ts>3.72$ ,  $ps<.001$ )。これらのことから、事例刺激は総じて肯定評価されていた。

解釈レベル条件で評定差が生じるか検討した。有能さ (表 3) に関して 5% 水準で有意差は認められなかったが、全体および一部を除く刺激事例で弱～中程度の効果量を示し、具体条件よりも抽象条件の

表3 解釈レベル条件毎にみた事例刺激の有能さの平均値

人物	具体条件	抽象条件	<i>t</i> 値	効果量 <i>d</i>
バラク・オバマ	6.07 (0.22)	6.55 (0.14)	1.90	-0.48
ネルソン・マンデラ	5.35 (0.29)	5.82 (0.19)	1.40	-0.35
ウィル・スミス	6.17 (0.21)	6.36 (0.15)	0.77	-0.19
スティーヴィー・ワンダー	5.79 (0.26)	5.85 (0.24)	0.16	-0.04
ジャネット・ジャクソン	5.10 (0.22)	5.21 (0.19)	0.37	-0.09
ビヨンセ	5.90 (0.21)	6.12 (0.17)	0.84	-0.21
ホイットニー・ヒューストン	5.17 (0.22)	5.61 (0.21)	1.41	-0.35
セリーナ・ウィリアムズ	4.83 (0.21)	5.27 (0.23)	1.44	-0.36
全体	5.55 (0.14)	5.85 (0.11)	1.77	-0.45

註) カッコ内は標準誤差

表4 解釈レベル条件毎にみた事例刺激の親しみやすさの平均値

人物	具体条件	抽象条件	<i>t</i> 値	効果量 <i>d</i>
バラク・オバマ	5.59 (0.25)	5.58 (0.18)	0.04	0.01
ネルソン・マンデラ	4.86 (0.26)	5.21 (0.24)	1.00	-0.25
ウィル・スミス	5.93 (0.19)	5.94 (0.23)	0.03	-0.01
スティーヴィー・ワンダー	4.90 (0.26)	4.88 (0.28)	0.05	0.01
ジャネット・ジャクソン	4.83 (0.27)	4.61 (0.26)	0.59	0.15
ビヨンセ	5.24 (0.27)	5.46 (0.31)	0.51	-0.13
ホイットニー・ヒューストン	4.69 (0.22)	4.79 (0.25)	0.29	-0.07
セリーナ・ウィリアムズ	4.48 (0.20)	4.42 (0.16)	0.23	0.06
全体	5.07 (0.16)	5.11 (0.15)	0.20	-0.05

註) カッコ内は標準誤差

方が有能であると判断していた。親しみやすさ (表4) に関しても 5% 水準で有意差は認められなかった。効果量はきわめて小さかった。

#### IAT 得点

典型例条件, 事例条件の各 IAT で *d* 得点を算出した (典型例条件:  $M = -0.02$ ,  $SD = 0.19$ ; 事例条件:  $M = -0.06$ ,  $SD = 0.24$ )。高得点ほど, 人種ステレオタイプに合致する形で黒人に対して否定的にみていることを示す。評価的に中性である値 0 と比較した場合, 典型例条件では 0 と異ならなかったが ( $t = 0.97$ ,  $df = 65$ ,  $ns$ ), 事例条件では有意傾向が認められ ( $t = 1.89$ ,  $df = 65$ ,  $p = .06$ ), どちらかといえば黒人事例を肯定的にみていた。

この *d* 得点に対し, 2 (解釈レベル: 抽象・具体) × 2 (刺激: 典型例・事例) の参加者間 1 要因参加者内 1 要因の分散分析を行った。その結果, 解釈レベルの

主効果 ( $F(1, 64) = 0.03$ ,  $ns$ , 偏  $\eta^2 = .00$ ), 刺激の主効果 ( $F(1, 64) = 0.73$ ,  $ns$ , 偏  $\eta^2 = .01$ ) は認められなかった。その一方, 有意に近い解釈レベル × 刺激の交互作用が認められた ( $F(1, 64) = 2.78$ ,  $p = .10$ , 偏  $\eta^2 = .02$ ; 図 1)。具体条件では, 典型例条件 ( $M = -0.05$ ) と事例条件 ( $M = -0.02$ ) との間で差はみられなかった ( $t = 0.56$ ,  $df = 64$ ,  $ns$ ,  $d = -0.17$ )。抽象条件では, 典型例条件 ( $M = 0.00$ ) よりも事例条件 ( $M = -0.09$ ) で肯定的に捉える傾向にあった ( $t = 1.84$ ,  $df = 64$ ,  $p = .07$ ,  $d = 0.40$ )。見方を変えると, 典型例条件では具体条件 ( $M = -0.05$ ) よりも抽象条件 ( $M = 0.00$ ) の方が否定的であったが, 有意差はみられなかった ( $t = 0.95$ ,  $df = 128$ ,  $ns$ ,  $d = -0.45$ )。事例条件では具体条件 ( $M = -0.02$ ) よりも抽象条件 ( $M = -0.09$ ) の方が肯定的に捉えていたが, こちらも有意ではなかった ( $t = 1.21$ ,  $df = 128$ ,  $ns$ ,  $d = 0.42$ )。

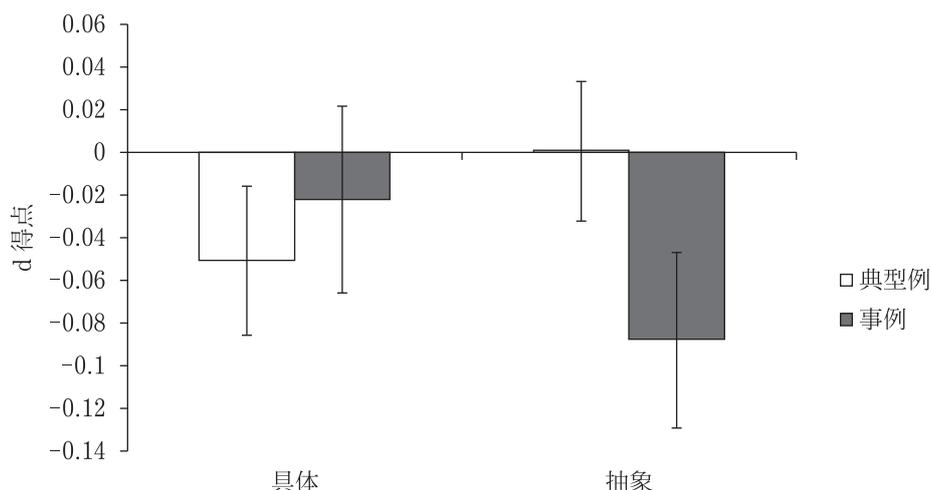


図1 各条件別にみた IAT の d 得点平均値 (ヒゲは標準誤差)

表5 事例の認知度, 顕在評価, d 得点との相関 (r)

	有能さ	親しみやすさ	典型例条件 d 得点	事例条件 d 得点	認知度
有能さ	1.00				
親しみやすさ	.43**	1.00			
典型例条件 d 得点	.08	.11	1.00		
事例条件 d 得点	-.30*	-.14	.15	1.00	
認知度	.50**	.54**	.20	-.24*	1.00

註) \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$

### 事例刺激評定と IAT 得点との相関

全刺激の認知度 (知っている人数), 各事例刺激における有能さ, 親しみやすさ得点と, 典型例条件および事例条件における d 得点との相関係数を算出した (表5)。その結果, 認知度は有能さ ( $r = .50$ ,  $p < .01$ ), 親しみやすさ ( $r = .54$ ,  $p < .01$ ) と正相関を示した。また, 認知度は, 事例条件における d 得点とも負相関を示した ( $r = -.24$ ,  $p < .05$ )。全体的に刺激事例を認知していると事例刺激を肯定的に評価する傾向にあり, 質問項目であっても IAT であっても同様の結果を示した。

次に, 有能さと親しみやすさとの間に正相関が認められた ( $r = .43$ ,  $p < .01$ )。さらに, 有能さは事例条件における d 得点とも負相関を示した ( $r = -.30$ ,  $p < .05$ )。事例条件の IAT で肯定的であると質問紙においても全般に有能であると評価する傾向にあった。親しみやすさと d 得点との間には相関はみら

れなかった。

### 典型例と事例との対応

典型例条件における d 得点が事例条件における d 得点をどの程度予測するか, この予測が解釈レベルによって異なるか検討するために, 事例条件の d 得点を基準変数とする階層的重回帰分析を行った。中心化した典型例条件の d 得点, 解釈レベル (具体:  $-1$ , 抽象:  $+1$  にコード化) および両者による交互作用項を説明変数とした。その結果 (表6), 主効果のみのモデル ( $R^2 = .05$ ), 交互作用項を含むモデル ( $R^2 = .05$ ) のいずれも有意とならなかった。各説明変数における標準偏回帰係数をみると (表6), 典型例条件における d 得点が正の効果 ( $\beta = .16$ ) を, 解釈レベルが負の効果 ( $\beta = -.16$ ) を持つことを示していたが, いずれも有意とならなかった。また, 交互作用項も有意ではなかった。

表 6 事例条件 d 得点への階層的重回帰の結果 (β)

	モデル 1	モデル 2
解釈レベル	-.16	-.16
典型例条件 d 得点	.16	.15
交互作用		-.06
$R^2$	.05	.05
$\Delta R^2$		.00

## 考 察

本研究は、マインドセット操作によって解釈レベルを操作し、否定的ステレオタイプにおける肯定事例を写真刺激とした単一カテゴリ-IAT（事例条件）への影響を検討した。一般的な成員の写真刺激による単一カテゴリ-IAT（典型例条件）と比較、関連を検討することで、解釈レベルにより集団表象が使い分けられる可能性を検証した。

実験の結果、具体条件では典型例条件と事例条件との間に差は認められなかったが、抽象条件では典型例条件よりも事例条件の方で肯定的評価が認められた。さらに、典型例条件でも事例条件でも解釈レベルの影響は有意ではなかったが、事例条件の結果パターンは具体条件よりも抽象条件の方で肯定的評価が認められた。これらの結果は仮説 1 を支持せず、むしろ正反対の結果である可能性を示唆する。また、典型例条件と具体条件との間で IAT 得点 (d 得点) との間に相関関係は認められず、この無相関は解釈レベルの相違によって調整されることもなかった。この結果は仮説 2 を支持しなかった。

このような結果になった理由として、手続き上の問題、集団表象の構造に関する問題が考えられる。

### 手続き上の問題

手続き上の問題として、写真事例に関する知識の問題と、典型例と知識の内容的対応の問題が考えうる。これらについてそれぞれ考察する。

本研究の前提として、写真刺激に対して典型例と事例のいずれも利用可能であることが求められていた。つまり、写真刺激人物に関する知識を実験参加者が有している必要があった。これに対し、知名度は 8 名の刺激人物に対して平均 5.73 名であり、こ

の前提は保証されなかった。この場合、事例知識を有しないために典型例に関する知識のみが利用可能となる事態が生じる。このことが結果に影響したかもしれない。

しかしながら、このことが本研究の結果をもたらしたとは考えにくい。仮に肯定事例に関する知識が利用できなかったとしても、典型例情報となるステレオタイプを有している。そのため、少なくとも抽象条件ではターゲットとなる写真刺激にステレオタイプを適用し、評価することが可能なはずである。そのため、仮説 1 を支持する結果が引き続き得られる可能性があるが、本研究の結果はむしろ正反対であった。また、抽象条件において典型例条件と事例条件との相関は認められておらず、ステレオタイプが適用されたという証拠は得られていない。写真人物に対して一定の個別処理が行われた可能性がある。

次に、写真刺激が必ずしも集団表象の反証事例となっていなかった可能性もある。ステレオタイプ内容モデル (Cuddy, Fiske, & Glick, 2007; Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002) によれば、社会集団は温かさもしくは親しみやすさと能力の 2 次元に区分して認知される。黒人集団はその区分において能力は低い温かいと両面価値的に捉えられる可能性がある。この場合、黒人ステレオタイプにおいても肯定的側面があり、肯定事例と評価が一致する可能性がある。このことが本研究の結果をもたらしたかもしれない。

しかし、こちらについても本研究の結果との関わりは希薄であると考えられる。本研究においてもっとも顕著な差が認められたのは、抽象条件における典型例条件と事例条件との差異であり、後者が肯定的であった。もし評価次元の対応が認められるのであれば、このような差異はみられなかったと考えられる。また、実際に相関関係を検討しても、先述の通り典型例条件と事例条件とは無相関であった。さらには、事例条件の IAT 得点 (d 得点) は親しみやすさとは相関せず、有能さと相関していた。事例条件の評価は主に有能さに関わることを示しており、温かさで関わるとする上記の考えとは対応しない。

### 集団表象の構造に関する問題

本研究の仮説が支持されなかった理由として、集

団表象において、典型例と事例との間で緻密な包含関係、階層構造が形成されているとは限らないという問題が考えられる (Hampson, John, & Goldberg, 1986; Fiske & Taylor, 2008)。たとえば、黒人集団と黒人政治家といった下位集団の特徴は一部重複するものの、厳密な包含関係にないかもしれない。つまり、黒人政治家というカテゴリーは黒人集団の下位集団であると論理的には考えられるが、黒人集団そのものとは別個のものと表象されている可能性もある (サブタイプ化: Johnston & Hewstone, 1992)。この場合、解釈レベルの推移により活性化される知識の抽象レベルが異なったとしても、下位集団が活性化しない可能性がある。本研究において典型例条件の d 得点と具体例条件の d 得点が無相関であったが、このことは肯定事例がサブタイプ化され例外カテゴリーとして扱われたことが影響しているかもしれない。また、肯定事例が有能な黒人としてサブタイプ化されていたとすると、抽象条件において典型例よりも事例の方が肯定的に評価されたことも説明しうる。有能な黒人カテゴリーは黒人カテゴリーと同レベルで表象されていたため、抽象条件においてこそ活性化し、写真刺激の処理に用いられたのだろう。

集団表象に関して階層構造が形成されていないという上記の説が妥当であった場合、次のような複数の含意がありうる。第一に、解釈レベルの相違が概念的知識の抽象レベル (Rosch et al., 1976) によるとする前提を置く限りにおいては、解釈レベル理論の適用範囲に制限を与えることになる。つまり、概念的知識のネットワークが相応に階層構造化される限りにおいて、解釈レベル理論の予測が成立することになる。たとえば、動物に関する体系的知識上では、心的距離の操作に基づいて解釈の抽象度が異なると予測されるが、本研究のような集団に関する知識上では心的距離の影響が生じないことになる。

第二に、解釈レベルの相違が概念的知識の抽象レベルによるとする前段の前提が疑わしくなるかもしれない。つまり、心的距離と認知の抽象度との関連は、概念的知識の抽象レベルに媒介されず、別の心的過程の影響である可能性が生じる。たとえば、自

己制御場面などでは目的-手段の階層構造が設定される (Fujita & Trope, 2014)。このような場面においてはじめて解釈レベル理論の予測が成り立つのかもしれない。この場合、目的レベル、手段レベルに用いられる概念的知識の抽象度は様々であって、他の調整要因の影響を受けて概念的知識の使い分けがなされるのかもしれない。これらの点について今後の検討が必要である。

#### 註

- 1) 本研究は JSPS 科研費 24530792 の助成を受けて行われた。また、本研究に協力いただいた島田知佳さん、渡辺千尋さん、鈴木世伶紗さんに感謝する。

#### 引用文献

- Brewer, M. B. (1988). A dual process model of impression formation. In T. K. Srull, & R. S. Wyer, Jr. (Eds.), *Advances in social cognition, Vol. 1*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 1-36.
- Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. (2007). The BIAS map: Behaviors from intergroup affect and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 631-648.
- Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 5-18.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 878-902.
- Fiske, S. T., & Neuberg, S. L. (1990). A continuum of impression formation, from category-based to individuating processes: Influences of information and motivation on attention and interpretation. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology, Vol. 23*. New York: Academic Press. Pp. 1-74.
- Fiske, S. T., & Taylor, S. E. (2008). *Social cognition: From brains to culture (1st Ed.)*. New York:

- McGraw-Hill.
- 藤島喜嗣 (2008). 焦点化された自己検索が計画錯誤に及ぼす影響と時間的距離感による調整効果 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集, Pp. 522-523.
- 藤島喜嗣 (2011). 誠実性概念の活性化が将来予測に及ぼす影響と時間的距離感による調整効果 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, Pp. 110.
- Fujita, K., & Trope, Y. (2014). Structured versus unstructured regulation: On procedural mindsets and the mechanisms of priming effects. In D. C. Molden (Ed.), *Understanding priming effects in social psychology*. New York: Guilford Press. Pp. 70-89.
- Fujita, K., Trope, Y., Liberman, N., & Levin-Sagi, M. (2006). Construal levels and self-control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 351-367.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Hamilton, D. L., & Sherman, J. W. (1994). Stereotypes. In R. S. Wyer, Jr., & T. K. Srull (Eds.), *Handbook of Social Cognition (2<sup>nd</sup> Ed.)*, Vol. 2. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp. 1-68.
- Hampson, S. E., John, O. P., & Goldberg, L. R. (1986). Category breadth and hierarchical structure in personality: Studies of asymmetries in judgments of trait implications. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 37-54.
- 樋口収・埴田健司・藤島喜嗣 (2010). 達成動機づけと締め切りまでの時間的距離感が計画錯誤に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **49**, 160-167.
- 樋口収・原島雅之 (2012). 解釈レベルと達成目標が将来の予測に及ぼす影響 社会心理学研究, **27**, 185-192.
- Johnston, L., & Hewstone, M. (1992). Cognitive models of stereotype change (3) Subtyping and the perceived typicality of disconfirming group members. *Journal of Experimental Social Psychology*, **28**, 360-386.
- Karpinski, A., & Steinman, R. B. (2006). The single category implicit association test as a measure of implicit social cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 16-32.
- Rosch, E., Mervis, C. B., Gray, W. D., Johnson, D. M., & Boyes-Braem, P. (1976). Basic objects in natural categories. *Cognitive Psychology*, **8**, 382-439.
- 潮村公弘・村上史朗・小林知博 (2003). 潜在的社会的認知研究の進展 IAT (Implicit Association Test) への招待 信州大学人文学部人文科学論集 人間情報学科 (編), **37**, 65-84.
- Trope, Y., & Liberman, N. (2003). Temporal construal. *Psychological Review*, **110**, 403-421.
- Trope, Y., & Liberman, N. (2010). Construal-level theory of psychological distance. *Psychological Review*, **117**, 440-463.

(ふじしま よしつぐ 心理学科)